

- 日 時：2020年2月23日（日）
- 場 所：立川教会
- 説教題：「安息日に麦の穂を摘み、癒しの業を行う。」
- 聖 書：旧約 申命記 8：1-6（旧 p294）
新約 ルカによる福音書 6：1-16（新 p111）
- 讚美歌：155「やまべにむかいて」197「ああ主のひとみ」

お早うございます。

さすがにこのところマスクを着けて外出するようになりました。

新型コロナウイルスの感染拡大は、従来のインフルエンザの拡大と比較して、不必要に恐れる必要はないと言う意見もありますが、それでもマスクを着け、手洗いを励行することは行いたいと思います。体力が落ちている時はより注意が必要ですので、しっかり食事を取り、睡眠も十分に取ることを心がけたいと思います。

さて、今日も、聖書の御言葉に入る前に、身近で起きた出来事からお話ししたいと思いません。

先週の夕礼拝のことでした。

これまで何度か出席していた高校生は複数いるのですが、一番新しく出席するようになった高校生が、証しを用意して来ました。皆の前で話したいと言う申し出です。突然のことで、どうしようかと思ったのですが、彼が用意して来た原稿に目を通し、証しをしてもらうことにしました。彼以外に出席者は私も入れて4名いたのですが、皆さん役員経験者で、彼の話しを受け止めてもらえと思ったからです。

彼は、私のメッセージの前に自分が選んだ聖書を読み、次のように証しをしました。

彼が選んだ聖書箇所は、使徒言行録第16章25節から34節、新共同訳聖書246頁です。読んでみます。

【使徒言行録第16章25節から34節、p246】

彼の証しです。何度か練習したのでしょうか、原稿には“(ここは) ゆっくり”とか“強く”とか赤字が沢山入っていました。

【1月下旬の奇跡】

証しが終わると、聞いていた3人の方から拍手が起こりました。

温かな、励ましの拍手でした。

私は、この原稿を改めて読み、書いた彼の気持を思いました。

すぐそばに迫っているクラス分けに絶望し、本気で死のうと思ったのです。

原因は“いじめ”です。

彼にとって、“いじめられる”ことがどんなに辛いかと思いました。

これは、病気やケガと同じに、経験した本人でなければその辛さは分かりません。

しかし、死ぬことを実行する前に、思い止まらせたものがありました。

他者の意見に耳を傾けると言う勇氣です。

そして、“尊敬する二人組”から言われた「死ぬなんてやめて」の一言に、行為を思い止まりました。

彼の前に訪れようとしている「クラス分け」と言う真つ暗な世界があります。

それから逃れたいと思いつつ、逃れることの出来ない現実があります。

そうした時、私たちならどうするでしょうか。

彼は、友を見出し、家族を思い、部活動での使命に生き、訪れて来る絶望に立ち向かおうとしています。そして、彼には、その思いを語れる夕礼拝と言う場があり、彼の想いを受け止めてくれる大人たちがいました。

先々週の祈禱会に続き、今回は夕礼拝と、改めて二つの集まりの持つ意味を神様から教えられたように思うのです。

それでは、今日与えられた御言葉に聞いてみたいと思います。

ここでは、3つの話しが記されています。

安息日に麦の穂を摘んだ話し、手の萎えた人を癒やした話し、そして12使徒の選びです。

その中で、安息日に関わる二つの話しについて考えてみたいと思います。

当時のユダヤ教の社会に生きる人々の日常生活の拠り所は聖書が教える戒め、律法でした。

そして、律法の根幹は、モーセが神様から示された十戒でした。十戒こそ、神様が命じられた守るべき掟であり、それを守ることによって神様から祝福を受けることが出来たのです。ですから、十戒は、神様と人間とを繋ぐ橋渡しの役目をすると考えられていました。

十戒について見てみたいと思います。

申命記第5章1節から22節です、新共同訳聖書291頁をお開き下さい。

【申命記第5章1節から22節です、新共同訳聖書p291】

今お読みした十戒の第4戒が、問題となっている安息日の規定でした。

安息日を守ってこれを聖別せよとの教えです。

ユダヤ社会において、この戒めがどれだけ重要な意味を持っていたかは容易に想像出来ます。労働は社会生活の土台であり、又人々の生活の基盤です。労働によって生産が可能になり、社会を成り立たせ、又労働による収入こそ、人々が生きることを可能にする手段です。それを聖別せよ、即ち一切の労働を止め、神を礼拝する時としなければならないと言う掟です。当時の支配階級であった律法学者やファリサイ派の人々は当然のようにその教えを厳しく守り抜いて来ました。守り抜くことによって、自分たちが、そして彼らが生活しているユダヤ社会が、神様からの祝福を受けると信じていたからです。しかし、イエス様は、彼ら

の面前で、弟子たちに、安息日にはしてはならない麦の穂を摘ませ、手の萎えた人への癒しの業を行うのです。真っ向から、激しく、律法学者たちやファリサイ派の人々が守り抜いて来た第4戒の戒めを打ち破るのです。その行為は、彼らにとって、その存在が否定されることを意味していました。だからこそ、11節。

11：彼らは怒り狂って、イエスを殺そうと話し合った。
のです。

この二つの話しの鍵となる言葉があります。

律法学者たちやファリサイ派の人々と主イエスとを分かち言葉です。

5節です。

5：そして、彼らに言われた。「人の子は安息日の主である。」

ユダヤの人々にとって、これまでは、律法が、そしてその根幹を成す十戒が、神様と人々を繋ぐ橋渡しの役目をしていました。しかし、主イエス・キリストが到来した今、神様と人々を繋ぐ橋渡しの役は、律法からイエス様にとって替わられたのです。イエス様が荒野の預言者ヨハネから洗礼を受けられた時、(ルカ 3:21p106)

21：天が開け、

22：聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

このことは、イエス様こそ、神の御子、神様と人々との仲保者であり、律法にとって替わる者であるとの宣言でした。

しかし、律法学者たちやファリサイ派の人々は、その事を理解することが出来ませんでした。彼らにとって、イエス様の言葉と行動は、ユダヤ社会の根底を揺るがし、破壊する、危険極まりないものであり、ユダヤ社会から抹殺すべき者としか考えられなかったのです。

私は、今日のこの箇所を読みながら、考えさせられたことがあります。

なぜ、律法学者やファリサイ派の人々の目は、曇らされていたのかと言うことです。

それは、形にこだわり、その形の深みにある命を見失っていたからだと思うのです。

なぜ、律法が必要であったのか。

なぜ、十戒を守らねばならなかったのか。

それは、根源的な意味で、人を殺すことではなく、活かすことでした。

人に生きる喜びと希望を与えることでした。

律法学者やファリサイ派の人々の行ったこと、それは、形にこだわり、人々から生きる喜びと希望を奪うものであったのです。イエス様は、その偽善を見抜き、妥協なく、否定されました。

そして今、私たちも問われています。何でも良い、何かしなければならぬ事柄があった時、その事が、隣りに生きる喜びと希望を与えることであるか、それともそうでない事で

あるかどうかを、です。その事を、心を砕きつつ神様に問い、神様に導かれて決断する歩み
をしたいと思います。

祈りましょう。